

## 芸術と考古学 一夏休みの遺跡一

杉沢遺跡（杉澤）は、戦前に土器棺墓が発見された著名な縄文時代晚期（紀元前約800年頃）の遺跡です。これまでに11基が見つかっていますが、墓以外の遺構は明かではありません。遺跡の中心部は現在の集落と重なり、遺跡の上に、現代の生活が営まれています。縄文中期末（紀元前3000年頃）から遺物が散見され、晚期には集落が継続的に営まれていたことがわかっています。弥生時代から古墳時代前半には、いったん、水田耕作に適した琵琶湖岸に移動したようですが、その後、散布する遺物から、古墳時代後期から現代にいたるまで1500年間程度、集落は継続していたようです。伊吹山麓の扇状地末端に位置し、地下の伏流水が湧き出て、清水が得られたことが集落継続の要因です。

8月、杉沢遺跡で立命館大学考古学・文化遺産専攻「旧石器・縄文ゼミ」（矢野健一教授）により、発掘調査がおこなわれました。今年度のテーマのひとつは「発掘=展示」です。美術家横谷奈歩氏が杉沢遺跡で作品を制作し、作品制作に使用した物を使用状況のままに近くの集会所で展示されました。横谷氏が作品を制作した地面直下を立命館大学の考古学を学ぶ学生が発掘します。現代から縄文時代までの約3000年間、人々が残した行動の断片が姿を現

し、地中での位置が記録され、取り上げられました。集会所では、横谷氏の作品に使用された物（現地表面をあらわす）の直下に、3000年間のゴミや土器などが、地中での位置そのままに空間に展示されました。

杉沢遺跡に、地上と地中を接続する芸術と考古学の新しい活動が刻み込まれた瞬間を、多くの来訪者が目撃しました。世界で初めての試みです。

（現地説明パンフより）



▲杉澤集会所での展示風景

### 情報 BOX

◆西福寺・株式会社湖北設計・米原市教育委員会では、下記の報告書を刊行しました。

『遠州好み』茶室 燕窓

米原市指定文化財「旧田中家新座敷棟」復原事業報告書

※長岡西福寺に移築復原された、天保10年建設の遠州流の茶室です。

◆姉川沿岸土地改良区から下記の冊子が発行されました。

『姉川水利の歴史』(112ページ、500円)

※中世末から近世初頭にさかのぼる姉川の水利慣行とその由来、変遷を、編集者が執筆・編集しました。

※問合先：改良区☎0749-58-0068

◆自然保護団体「伊吹山ネイチャーネットワーク」では、下記の伊吹山大探検シリーズ3部作を刊行されました。

『伊吹山を知るやさしい地学の本』(75ページ、500円)

『伊吹山を知るやさしい生きもの学の本』  
(83ページ、500円)

『伊吹山を知るやさしい山とひと学の本』  
(115ページ、600円)

※米原市伊吹山文化資料館で取り扱っています。☎0749-58-0252

◆米原市商工会では、下記のマップを作成されました。

『滋賀県米原市観光マップ まいばらの歴史街道』

### ◆◆編集後記◆◆

今回も中井さんに玉稿を賜りました。ありがとうございます■米原市教育委員会では、2011・2012年に引き続き、今年度から2ヶ年で立命館大学と杉沢遺跡発掘調査に取り組みます■編集子も、盆の午前中、毎日現場に行ってました■伊吹の山の中で自儘に遺跡を掘ってきましたが■ほかの人の現場、学術調査は、なにかと刺激的で、ネコ押すこともなく、飽きずに眺めていました■手伝わずにゴメンね■なによりも、明るい学生さんたちが、夏の集落のなかを行き来するだけで、ムラに活気がありました■集落の夏祭りでは、テント立てから屋台の準備、売り子、カラオケの熱唱など…盛り上がってました■現場には野菜の差し入れが毎日。美味しい空気と野菜と涼しい伊吹。良かつたですか。（シャンギリッ子）

### 米原市文化財ニュース

## 佐 加 太 第46号

発 行 平成29年10月1日

編 集 米原市教育委員会

〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206

米原市教育部 歴史文化財保護課

TEL0749(55)4552



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第46号

2017年10月1日

滋賀県米原市教育委員会

## 靈仙山頂採集の有舌尖頭器

### 採集石器の観察

米原市にそびえる伊吹山（1377メートル）と靈仙山（1084メートル）は、『淡海温故録』（1680年頃編纂）に、比良・綿向とともに近江の「大山高峯也」。『淡海木間攬』（1792年）に「江陽四高山」と記された滋賀県を代表する高山です。伊吹山頂では、これまでに14点の石鏃と1点の石のナイフ、石を割った屑がみつかっています。一方で、南に対峙する靈仙山では、時代を問わず、これまでほとんど考古学的な知見はありませんでした。平成28年7月、靈仙クリーンロードクラブの中村幸雄氏が、登山道の保全確認中に山頂手前の鞍部（標高約1000メートル付近）で、1点の有舌尖頭器を採集されて、縄文人の活動の痕跡が初めて確認されました。

有舌尖頭器は、全体に灰黒色を呈する粘質感のあるチャート製で、ところどころに石英の白い筋が網の目に入ります。靈仙山北麓には、縄文時代中期に地元のチャートで石鏃を作った番の面遺跡（梓河内）が著名ですが、上記の特徴から目視ではあります

在地のチャートではないと思われます。穂先が節理で欠けており、残存長5.2センチ、幅2センチ、厚さ0.7センチ、重さ8グラムを測ります。背面（左側）は見栄えを意識して、斜状に細い並行剥離痕が並び、高い押圧剥離の技術がみられます。腹面は雑なものの剥離は全面におよびます。身部の両側縁は直線的で、側縁は鋸歯状に仕上げられています。横断面形はレンズ状を呈します。基部は調整は甘く、丸みをおびて返しは不明瞭。左右非対称で、わずかに内湾して逆三角形の舌部となります。

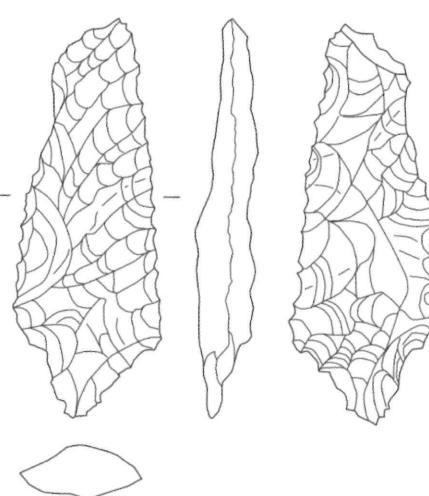
腹面が作りこまれておらず、基部の調整が雑な点や、身部上部の縦方向の剥離で先端が折れたようにみえることから、製作途中で放棄された可能性も捨てできません。

縄文時代草創期に属する資料と考えられます。

### 出土地点の考察

米原市内では、これまで4点の有舌尖頭器が出土しています。大乾古墳群（上多良）、狐塚遺跡（高溝）、高溝遺跡・法勝寺遺跡（高溝）で、いずれも琵琶湖岸近接地の標高85～90メートル付近の低湿地遺跡です。滋賀県全体の草創期遺跡を見ても、湖南と湖東の洪積丘陵の縁辺部、琵琶湖（内湖や瀬田川を含む）周辺の沖積低地や河床・湖底に大部分の遺跡が立地しています。このなかで、近江四高山のひとつ靈仙山頂1000メートルの出土地点は注目されます。

相谷熊原遺跡（東近江市）の調査結果から、草創期の縄文人は、石器の石材獲得などのために回帰的遊動生活をしていたと想定されています。また、岐阜県や長野県では1000メートルを超える高地での出土例もあり、鈴鹿山麓を行き来した人々にとって、1000メートルの比高差は困難なものではなく、逆にこの高低差は食料の多様性を生み出す格好の獵場ともいえます。今回の出土地点は決して特異なものではなく、今後遺跡が検出される可能性も含んでいると考えられます。（高橋順之）



▲有舌尖頭器実測図 (S=1/1)

# 伊吹山の山城 一その2—

滋賀県立大学 教授 中井 均

## 上平寺城と上平寺館(京極氏館)

北近江の守護である京極氏は15世紀後半に内訌が長く続きます。永正2年(1505)に高清と政経が日光寺で和議を結ぶと(日光寺の講和)、同年に高清は北近江支配の拠点として上平寺城を築きます。上平寺は伊吹山の南に張り出した標高700メートル付近に位置しています。ちょうど弥高寺の位置する尾根とは谷を隔てた東側の尾根にあたります。瘠尾根上に一直線上に曲輪が配置されています。上平寺という名称からこの山城も寺院を利用したものと考えられますが、現状の城郭遺構からは寺院の存在を示すものはうかがえません。上平寺城の場合、南山麓に居館となる上平寺館跡が位置していますが、この居館に伴う家臣団屋敷も方形に区画されており、この山麓居館の前身に上平寺が位置していたものと考えられます。

では、上平寺城の構造を見ていきたいと思います。まず尾根最頂部の標高669メートルには主郭が配置されています。主郭の周囲には低い土塁が巡ります。この主郭の背面が尾根継ぎとなるため、遮断線として巨大な堀切が構えられており、尾根筋を完全に切断しています。主郭北端の土塁が高く幅厚となっているのは、この堀切を押えるための櫓台であったとみられます。本丸の南方には土塁を巡らす曲輪が二段構えられ、本丸との間には横堀が巡らされ、横堀



主郭

▲弥高寺跡から上平寺城跡を望む



▲上平寺城跡主郭

は両端で堅堀となって斜面移動を封鎖しています。

上平寺城でもっとも注目されるのが、この土塁囲いの曲輪の虎口です。虎口に対して土塁は直角に屈曲し、外枠形虎口を形成しています。この土塁囲いの二つの曲輪のさらに南方に曲輪が二段設けられていますが、その間には堀切が構えられています。この堀切を境に北側の曲輪には土塁が構えられ、南側の曲輪には土塁が構えられておらず、曲輪に階層差が認められます。南側の斜面地には堅堀が放射状に構えられています。

從来上平寺城は京極高清によって築かれ、現存する遺構もそのときのものと考えられていました。ところが外枠形虎口や放射状の堅堀群は永正2年(1505)に築かれたものとはとても考えられません。こうした施設は戦国期の到達点を示すものです。『信長公記』には「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ・かりやす両所に要害を構へ候。」(元亀元年(1570)六月条)とあり、長比城(米原市長久寺)と荔安城の二城が浅井長政によって築かれたことがわかります。

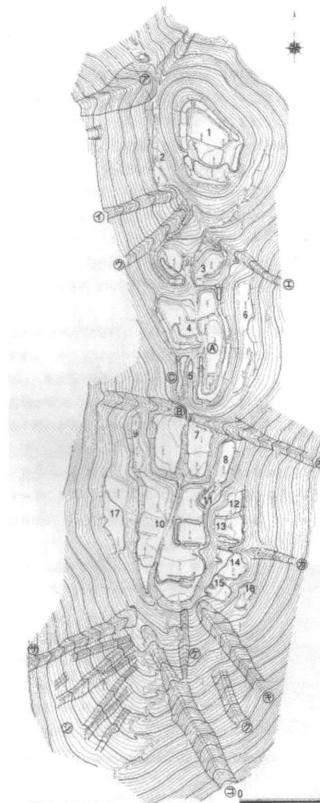
この年に浅井長政は織田信長を見限り朝倉義景と結びます。そして敦賀に信長を挾撃するのですが、信長は朽木谷を抜けて何とか京都に戻ります。そして近江から伊勢に抜け、岐阜城に帰城します。信長は岐阜城で一旦軍勢を立て直し、近江への進撃を開始します。浅井長政はこの信長の反撃に対処するために北国脇往還沿いに荔安城を構え、中山道沿いに長比城を築きました。その築城普請には越前の朝倉氏も加わっていたのです。現存する上平寺城の遺構はこの浅井長政と越前朝倉氏によって築かれた荔安城のものとみられます。

これまでこの元亀の浅井氏によって築かれた荔安城は上平寺城の部分のみと考えられていたのですが、弥高寺跡の発掘調査によって、弥高寺も元亀元年に城郭として改修された可能性が高く、荔安城は上平寺城と弥高寺の二つの部分から構成される城であったことが判明しました。

さて、こうして信長軍に対して築かれた荔安城でしたが、浅井氏より守備を任されていた坂田郡の武



▲外枠形虎口



▲上平寺城跡概要図

前一乗谷朝倉氏遺跡には義景館庭園、諏訪館庭園、中之御殿庭園など多くの庭園が残されていますが、これらは発掘調査によって検出されたものです。周防守護大内氏の館でも庭園は発掘調査で検出されています。ところが上平寺館では埋もれることなく庭園が残されていたのです。

上平寺館に関しては江戸時代に描かれた絵図が伝えられていますが、そこにもこの庭園は描かれており、「御屋形様御自愛泉石」と記されています。守護京極氏が愛でた庭園であったことがわかります。絵図には庭園に面して方形区画が描かれており、「御屋形」と記されており、この方形区画が守護館でした。さらに絵図ではこの館の周辺に方形に区画された屋敷地が描かれ、蔵屋敷、隠岐屋敷、弾正屋敷、廄などの表記があり、家臣の集住地であったようです。

庭園に面した御屋形では発掘調査が実施され礎石建物の一部が検出されています。庭に面した形状より、会所的施設として設けられた建物であったことはまちがいありません。注目されるのは、御屋形からの出土遺物です。遺物の大半を占めるのは土師器皿です。かわらけと呼ばれるこの素焼きの皿は飲酒に用いられる杯として使用されました。さらに上平寺館跡より出土したかわらけは京都の足利將軍邸で用いられたものと同じ、手づくねで作られたもので、京都ブランドを真似たものでした。全国各地の守護所でも出土しており、守護が京都の将軍の饗宴を地方で真似るために用いたのです。

そしてこうした饗宴にもっとも重要な役割を担ったものが庭園です。足利將軍邸を描いた洛中洛外図屏風では、將軍邸の庭園は屋敷地の約四分の一を占めており、非常に重要な施設であったことがわかり

ます。飲酒用のかわらけとともに地方の守護所に庭園も伝播したのです。上平寺館の庭園は池泉回遊式で、中島には巨大な景石が配され、山側の斜面地には滝組と考えられる石組も認められます。

さらに発掘調査によってこの庭園に面して二棟の礎石建物が検出されています。いずれも縁の廻る建物で、その位置から会所や泉殿に相当するような建物であったと考えられます。

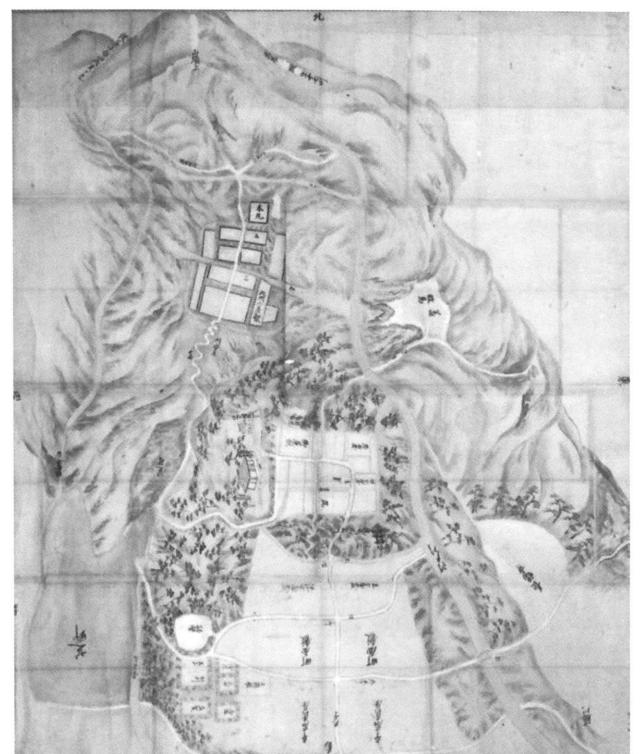
伊吹山の山麓に上平寺館跡を訪ねると、いまも残された庭園から当時の幽玄を感じることができます。



▲上平寺館跡庭園



▲礎石建物検出状況



▲『上平寺城絵図』(市文化財)